

+ Viva Kango

Campus News of Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

日本赤十字北海道看護大学

第六回公開講座

二十一世紀の健康づくり 救急・災害事態にそなえて

平成十七年度大学公開講座（第六回）が、昨年九月から十月の水曜日、五回にわたって開催されました。講師は本学の教員がとめました。自動体外式除細動器（AED）を用いた実技では、日本赤十字社救急法指導員十名のご協力を得て行われました。受講者総数は一七七名で、市民の救急・災害事態に対する関心の高さがうかがえました。講座修了後のアンケートでは、時期や回数など「よかった」という声が大多数で、今後への期待と要望が寄せられました。



第六回公開講座
アンケートより

受講者総数一七七名中、六十六名の方がアンケートに協力して下さいました。開催時期・開催時間・曜日・講座回数に対して、「よかった」と回答した方がそれぞれ六十三名と大多数を占め、受講料は全員が「適当だった」と答えていました。

講義に対しては、「どの内容においても、昨今の状況から欠くことのできない基本かつ詳細について、多くを学習することができた」「AEDを用いた除細動の実技は一度でも体験しているといないでは格段に違うと思う」「薬の話や、介護、心のケアなど勉強になった」「大変役に立つことばかりだった。大学があるとこんなに役立つとは思わなかった」など、たくさん感想が寄せられました。

今後取り上げて欲しい内容として、母子看護、薬について、うつ病などの精神疾患、児童虐待、子育て支援、職場の安全衛生、寝たきり予防があげられていました。

また、「講座の案内を広く伝えて欲しい」「受講にあたって小型バス（時間・費用がかかって）の利用ができないか」など、今後の開催に向けた要望が出されました。受講していただいた市民の皆様、およびご協力いただいた皆様どうもありがとうございました。

■第一講 九月七日
健康であること
「身体と心を豊かにする」



教授 長谷部佳子

■第二講 九月十四日
救急箱の薬理学
「もしもの時の薬の知識」



助教授 根本昌宏

■第三講 九月二十一日
市民が市民を救うために



教授 河原田栄子

■第四講 九月二十八日
家族にできる高齢者の健康支援



講師 福家修子

■第五講 十月五日
災害時のこころのケア



助教授 尾山とし子

平成17年度

看護研究演習 ポスター発表会

昨年十一月二十四日、本学アリーナにおいて四年生による「看護研究演習」ポスター発表会が催されました。本年度の発表総数は五十九件（個人二十六件、グループ三十三件）を数えました。今回はパネル展示に加えて、口頭発表とそれに対する質疑応答も加わり、活気を帯びた発表会となりました。発表を終えた学生の声を聞いてください。



■「実習経験を踏まえて自分の行いたい研究ができ、達成感を得ることができました。先生の協力、そして新しい発見を見出したいという気持ちが出る気がつなごう」といいます。

（基礎看護学 渡邊亜衣）

■私達は被災地における看護師のストレス実体に関する研究を行いました。先生にアドバイスを頂きながら二人で助け合い、充実した研究演習を行うことが

できました。

（成人看護学 澤由以子）

■初めての研究で大変さもありましたが、先生に助言を頂き三人で協力しながら楽しく研究を進められ、多くの学びを得ることができました。この経験を将来、看護の場で生かしていきたいです。（老人看護学 浦島香織）

■私たちは妊婦の胎児への愛着に関する研究を行いました。実習と重なり苦しい時期もありましたが、先生から助言を頂きながら皆で助け合い研究を進め、満足いく成果をあげることが出来ました。

（母性看護学・助産学 新宅真理子）

■私は三人の仲間と共にダウン症児と父親の現状について研究しました。そこではお父さん達の思いをたくさん知ることができました。子どもと父親の関係は調べていくととても興味深いものがありました。

（小児看護学 佐藤静世）

■研究を行っていた八ヶ月間は

多くの方の協力で支えられた日々でした。研究では家族の大切さを学べ、将来、家族全体を視野に入れた患者様の援助に繋がりたいと思います。

（精神保健看護学 新屋敷有紀）

■研究は大変ですが、それ以上に学びも大きいです。研究が修了した時の達成感は計り知れない喜びが込み上げてきます。この研究で学んだことは自分の自信に繋がります。視野が改めて広がった気がします。

（地域看護学 成松和恵）

■研究はメンバーと協力し、忙しい日々でしたが発表を終えると達成感に溢れています。ご指導をしてくださった先生をはじめ発表を聞いてくださった方々ありがとうございました。

（外科疾病論 野村直樹）

■実際に研究を行うことで知らないことを学ぶことが出来ただけではなく、自分の持っている知識をより深めることが出来ました。また、観察力及び考察力を高めることができ、自分のためになりました。

（形態機能学 明堂靖史）

■最初は研究というものに戸惑うところもありましたが、良い経験になったと思います。仮説、実験とその準備、その後の結果・考察が難しかったですが今は達成感でいっぱいです。

（生化学・薬理学 城石一範）

■研究は試行錯誤を繰り返しながら進めていくので、なかなか大変です。しかし、ポスター発表

表や論文をまとめることは達成感が大きく、とても良い経験となりました。

（情報科学 国沢しほ子）

■一人はどうやって歩くの？この問いに対して頭と体を使って考える日々でした。データの処理は大変でしたが充実もし、研究を楽しむことができました。（体育健康論 大竹亜由美）

■グループ研究はチームワークが不可欠であるということ、限られた時間の中で一つの事を成し遂げる事の大切さを学びました。とても満足いく研究ができました。（語学 佐藤祐介）

小児看護学会北海道地方会 本学で開催！

地方会会長 上野美代子

小児看護学会北海道地方会が「子どもの主体性を尊重する看護の実現に向けて」をテーマに昨年九月三日（土）・四日（日）の二日間本学会会場に開催されました。両日とも天候に恵まれ道内外から一・二名の参加者が来場し、本学からも学長、学部長、事務局局長として教職員の皆様にご参加頂き盛会となりました。

初日の開会式では本学会理事長日沼千尋氏の挨拶があり、続いて会長講演「子どもの生活リズム／活動と睡眠」が行われ、三つの会場に分かれそれぞれ熱心な意見交換が行われていました。夕方の特別講演「子どものインフォームドコンセントの実践に向けて」には一般市民の方々や本学学生等の参加があり、医療処置・ケアのプレパレーションを興味深く聞いていました。

二日目には、一般公募による口演八題、示説五題の演題発表が行われました。会場一杯の参加者は熱心に質疑応答を行い、三十分遅れの閉会式で二日間の予定すべてを無事に終了しました。



国際交流のつどい

昨年十二月二十一日、学生・教職員一四四名が参加をして、本学講堂で「国際交流のつどい2005」が開催されました。今回は、日本赤十字社の東洋国際部長をお招きし「赤十字人道支援の現状と課題について」講演いただきました。

講演では、最初に人道危機の現状と課題で、三つの人道危機として武力紛争、災害そして細菌感染症（エイズ、結核、マラリア）が第三の災害として加えられていることの解説。

次に国際赤十字の取組で、難民救援における必須十項目、国民に忘れられているがまだ難民救援は長期化して続いている現状。

最後に、史上最大規模の災害と言われているスマトラ島沖地震・津波災害での日本赤十字社の救援活動紹介。そして、被災にあつた地域住民がボランティアで遺体処理をしたお陰でWHOが警告していた感染症が起きなかつた話や、今、国際救護では、お金よりも人を必要としている。被災地では、医師よりも看護師の力が大きいと、これから看護師を目指す学生達に熱いメッセージを送っていました。



看護学実習について

昨年九月二十六日から十月七日までの二週間、二年生の基礎看護学実習IIが行われました。北見赤十字病院での病棟実習では、健康上に問題がある個人（患者）を対象に、人間関係を保ちながら、生活者としての患者理解を深め、さらに、アセスメントを通して健康と生活に関わる問題を明らかにし、その援助過程を学ぶことを目的に実施されました。一年生の実習から約半年が経過した中、今回の実習における学びや感想を、実習を終えたばかりの二人に寄せていただきました。



2年生 白澤季枝

脳神経外科は、厳しい・大変だと噂で聞きびくびくしながら実習の日を迎え、私は、脳梗塞で失語症の患者さんを受け持たせていただきました。

初日は行わなければならぬ看護で頭が一杯になってしまいました。帰宅後その日実施した看護を振り返ると、患者さん中心の看護ではなく自分中心の看護を行っていたことに気づきました。次の日からは、臨床スタッフの方や先生の助言をいただき患者さん中心の個別的看護を行うことで、患者さんにとってよりよい看護を提供できたのではないかと思います。

実習は最も得るものが多い授業です。普段、授業で聞いている疾病やその症状を持った患者さんが実際に目の前に存在するのが実習です。

独特な病棟の雰囲気、患者さんを受け持つ責任など決して楽なものではありません。しかし、辛いことばかりではありません。受け持った患者さんの回復は、喜びであり、感動でもあります。そのためには、事前学習や援助技術の復習が必要だと実習を行って実感しました。



2年生 舘山卓也

に、学んだことが多く成長できた気がします。ますます看護師の魅力を感じました。

シリーズ 研究と私

保健師の実践活動に役に立つ研究



教授 大西章恵

様々な格差が広がり人々の生活・健康に影響を落としている時代だからこそ、地域全体を視野に置き活動している保健師の役

割は大きいと思っている。そんな保健師たちに、先を見越して生き生きと活動を行ってほしいと願っており、それが私の研究テーマである。

近藤講師、真溪助手とともに

本学の研究助成を受け北海道開拓保健師に対するインタビューに取り組んだのは五年前であった。開拓保健師の行った活動は、厳しい環境の中「明日何を食べるのか」に追われ次第に絶望していく開拓者一人ひとりへの個別支援に始まり、開拓者同士の生活改善の知恵を出し合い、悩みを語り合うグループ活動を通じて、地域全体への活動に発展し

ていくものであった。それは、家庭訪問を通して個々の思いや生活実態を捉えていたからこそ実現できたわけで、保健師にとって家庭訪問は活動の基本であり重要であることを再認識することができた。

現在は、関連テーマである「行政保健師の家庭訪問に対する認識の実態と今後の課題」について共同研究を行っている。北海道の行政保健師全体を対象にアンケート調査を終え、現在分析中である。現場の保健師達に「今後大切にすること」を提言できる研究にしたいものである。

五日間という短い実習でしたが、臨床で実際に看護を実施することに、学内で行っている技術練習・授業を基盤としながらもその患者さんにあつた看護を提供していかなければいけないと改めて実感したと同時に

実際に僕は事前学習不足で実習中に苦労しました。情報はより多く持っていた方がよいと思います。受け持つ患者さんの疾患、合併症、術式、薬効などの情報を系統的に学習することで初めてどういった看護が必要か考えることが出来るのです。そういう意味で実習は多くを学ぶことが出来、自己の看護観を見つめることが出来る場であり授業なのだと思えます。

■初の消防訓練を実施

昨年七月十五日午前十一時五分から本学で初めての消防訓練を実施しました。

訓練は、講義演習棟二階の実験室から火災が発生したという想定で、自衛消防本部設置訓練、通信連絡訓練、避難誘導訓練、初期消火訓練、警備訓練、応急救護訓練を行いました。

訓練には、領域別看護学実習中の四年生を除く三年生の学生と教職員が参加をしました。学生は、二時限目の授業中火災放送の後、教員の指導のもと、入

入 試

《看護学部》

今年から社会人入試(定員若干名)が導入され、推薦入試(定員四十五名)と同じ昨年十一月二十日に本学を会場として行われました。推薦受験生六十四名及び社会人受験生五名が小論文と面接を受け、推薦入試五十一名社会人入試五名が合格しました。

一般入試(定員四十五名)は、今年二月四日、本学と札幌及び東京の三ヶ所で行われ、受験科目は英語、小論文そして選択科目(数学・化学・生物)の中から一科目計三科目です。

情 報

また、センター入試(定員十名)は、英語・国語そして選択科目(数学・化学・生物)の中から一科目の計三科目で本学独自の試験は課しておりません。合格発表は一般・センター入試とも二月九日です。

《大学院看護学研究科》

昨年の九月二十五日に実施しました一期の入学試験(定員六名)は、本学を会場にして各専門領域の試験科目、英語そして面接を受け二名が合格しました。

二期の入学試験は、今年の二月二十六日に実施し、二月二十八日に合格発表します。

数確認をして避難場所であるグラウンドまで避難訓練をしました。訓練終了後、北見地区消防組合の高田副署長から、「初めてにしては、スムーズにどの訓練も行われていました。」と言う講評をいただきました。

その後、消防署職員の指導で、学生達は消火器の使用訓練を行いました。

本学では、今後毎年消防訓練を実施していく考えです。



■JICA研修員受入

本学では、昨年十月十二日から同二十八日までの十七日間、JICA研修員の受入を行いました。テーマは、「寒冷地における地域医療と保健衛生」で、今年度で三回目の受入です。

今回は、キルギス共和国から二名の医者、モンゴル国から一名の医者と初めて看護師が一名参加し本学で研修を受けました。

講義は本学の教員七名が担当しました。研修カリキュラムは、四つの大項目からなり第一は、

「健康の保持増進 第二は、「生活習慣病を防ぐ」第三は「地域保健活動」第四は「日本の社会」です。

研修員四名は、講師の指導のもと毎日熱心に講義を受けていました。

十月二十日には、在京キルギス共和国のクタノフ・アスカル大使が本学を訪れ松本学長に研修生受入のお礼をし、研修の様子を視察していました。



■教職員人事

【退職】

- 平成十七年八月三十一日付 講師 吉田 和枝
- 平成十七年九月三十日付 助手 伊藤ゆかり

● 平成十七年十二月三十一日付 講師 石若令江

【採用】

- 平成十七年九月一日付 講師 岡本 明子
- 平成十七年十月一日付 助手 田中 和子

編集後記

暑かった夏の余韻に浸っていた秋でしたが、12月に入っていきなり冬本番に突入しました。年間降雪量が2m前後の北見にしては厳しい冬になりそうな予感がします。

さてViva Kango 15号をお届けします。今回は公開講座、看護研究発表会、研究と私、看護学実習を中心に紙面を構成しました。いずれも「学ぶ」ことの喜びが伝わる内容です。それらを活力に新しい「平成18年」を堂々と歩んで行きたいものです。

奨学金貸与状況

各種奨学金団体等からの奨学金の貸与決定状況は次表のとおりです。
平成17年12月1日現在

名 称	貸与金額	1年生	2年生	3年生	4年生
日本赤十字社北海道支部	年額 60万円	47	46	44	46
日本赤十字社看護師同方会	月額 2万円	1	3	3	1
北海道看護職員養成修学資金	月額 3.6万円	2	1		2
北見市私立大学生奨学資金	年額 60万円限度	18	23	9	
北海道厚生連奨学金	月額 4万円			2	1
日本学生支援機構 第1種奨学金	月額 5.3~6.4万円	16	11	16	14
「きほう21プラン	月額 3~10万円	31	36	27	30
日本赤十字社千葉県支部	年額 75万円			1	
武蔵野赤十字病院奨学金	年額 60万円		1	2	2
静岡赤十字病院奨学金	月額 6万円		2	1	
長浜赤十字病院奨学金	月額 5万円		1		
和歌山医療センター奨学金	年額 60万円				1
さいたま赤十字病院奨学金	月額 5万円	1	1		

※複数受給可能

日本赤十字北海道看護大学学内誌

+ Viva Kango

第15号

発行日/2006年1月30日
編集・発行/広報委員会

〒090-0011 北海道北見市曙町664-1
Tel.0157-66-3311 Fax.0157-61-3125
mail to: kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp
http://www.rchokkaido-cn.ac.jp